特集・京浜臨海部再編整備・Ⅰ世界に開かれた海上産業都市づくり❸

◎京浜臨海部と浅野総一郎―先人たちの遺産

■東　秀紀

1―臨海部埋立の端緒
2―浅野総一郎の業績
3―京浜工業地帯の形成
4―浅野の死と臨海部の発展

1―臨海部埋立の端緒

《その頃八十歳に大方手の届きかかった安田さんは、二人の技師を連れられて、川崎在若尾新田の根本という海水宿屋に、三日三晩泊まられた。安田さんは、朝夕の潮の干満を調査するために、毎日朝は六時から、海岸に飛び出て、親しく潮の引き具合を踏査され、夕刻の五時からは、また釣舟に乗つて魚を釣りながら、親しく潮の満つる様を視察された。干満時の沖合三浬（マイル）までは、深いところで六尺（約一・八メートル：引用者注）、浅いところで三尺、ほとんど砂浜に等しい浅瀬で、三浬沖合のところには、百年以上の年数を経たとしても思ぼしき藻が、海底に繁茂している。埋立地としては、誠に得難い理想地である》（『浅野総一郎』）

浅野総一郎と安田善次郎の二人が宿屋に泊り込んで潮の状態を調べた時期は、一九一二（明治四十五）年に鶴見埋立組合が設立された、その前年頃であったろう。当時でいえば全くの老人である二人が三日三晩、鶴見・川崎の沖合を調査して埋立を決意したとき、京浜工業地帯は産声（うぶごえ）を挙げたのである。

京浜臨海部埋立は、品川沖に近代的な東京港を建設しようという構想から始まる。

明治初期日本の港湾施設は貧しく、明治三十年ころまでは横浜港にも桟橋がなく、船が着くたびに客を沖合に停泊した船から小蒸気船で海岸に運び上陸させるという貧弱な状況であった。上海の紡績会社が大型ボイラーの製作を芝浦製作所に注文しようとしたところ、東京からの輸送費が、距離にして数倍もあるマンチェスターからより三割以上高かったという話が残っている。

桟橋がつくられた後も、輸送費の問題は解決されなかった。港で荷揚げされた貨物を、大消費地である東京方面に運ぶ航路は、多摩川の土砂が流出し、遠浅になっているため、手漕ぎの艀（はしけ）に頼るしかない。横浜から東京までの回漕費は、ロンドンより横浜までの運賃とほぼ同額であった。

また航路には防波施設がなく、積み荷の浸水、座礁、沈没といった海難事故が多発して、しばしば人命も失われた。

近代的港湾施設と運河の必要性が叫ばれながら、当時の日本政府には公共投資を行う財政的余裕がない。

浅野総一郎が初外遊の途についた一八九六（明治二十九）年とは、そうした時期にあたる。

東洋汽船など、海運事業を手広く行っていた彼が、欧米で目を奪われたのは、先進国の港湾設備が如何に素晴らしいかであった。ホノルルやバンクーバーの港には艀が見当たらない。ドイツのハンブルグ港では、汽船が岸壁にピタリと横付けされ、船側に沿って貨車が並んでいて、貨物を速やかに鉄道で運ぶことができる。そして世界の大都ロンドンのテームズ川河岸には一、二万トン級の巨船が悠々と停泊している…。欧米の港はどこへ行ってもみな理想的な設備がほどこされているように見え、浅野にはすべてが驚きと新発見の連続であった。

帰国した彼はすぐさま巨船の直行できる東京港の建設と東京―横浜間の運河開削を決意し、まず最初に東京港を建設するため、品川沖二十一万坪（約七十ヘクタール）の埋立を出願した。行政による築港計画がいたずらに日を費やしてばかりいるのに業を煮やし、それを民間で実現しようと考えたのである。

だが、この計画は当時の東京市長尾崎行雄の理解は得たものの、市会によって握り潰されてしまう。

へこたれない浅野は、次に東京―横浜間の運河をつくろうと企てた。それも遠浅の海の沖合に防波堤を築き、陸との間に運河を掘るだけでなく、発生した土砂により、海面を埋め立てて、大工業地帯を同時に造成しようという「一石二鳥」の計画である。

このようにすれば、埋立工事費は土地の売却で短期に回収することができるであろう。

東京帝国大学広井勇教授の助けを借りてまとめあげられた埋立計画は、規模にして多摩川から鶴見川河口に至るまでの、実に百三十万坪（約四百三十ヘクタール）に及んだ。

あまりの規模の大きさに驚いた神奈川県は許可を保留する。だが、何度か折衝の後、確かな金融関係者の連署があれば、という条件を引き出した浅野は、日頃から付き合いの深い銀行家安田善次郎を訪ねたのだった。

示された計画を一瞥（べつ）した安田は、「この事業は、わが国経済の将来に影響を及ぼす大きなものです。一日もゆるがせにはできません。さっそく現地に行ってみましょう」と、自ら計画地の踏査を申し出た。

安田が行ってみると、地形は屈曲した湾をなしており、多摩川から流出する土砂は海岸一面に堆積して沖合まで浅瀬となっている。しかも、左右に東京・横浜の二大都市を控え、背後には東海道線の鉄道が走っているので、将来の理想的工業地帯として申し分ない。

三日三晩の視察から帰った安田は、浅野の計画が十分見込みのある事業だと確信し、投資を約束した。そのとき二人の目には、製造業の大集積地となる京浜工業地帯の将来の姿が見えていたのであろう。

「五十六十鼻たれ小僧、男盛りは八・九十」

この頃八十歳近くなっていた安田が、十歳年下の浅野に送った戯れ歌である。

一九一二（明治四十五）年、渋沢栄一らにも参加を仰いで設立された鶴見埋立組合は、規模を百五十万坪（約五百ヘクタール）に拡大した埋立計画を、神奈川県に改めて出願した。

事業免許が下ったのは翌一九一三（大正二）年一月のことである。

2―浅野総一郎の業績

ここで京浜埋立に至る、浅野総一郎の業績について、簡単に説明しておこう（図―1）。

浅野総一郎は、一八四八（嘉永元）年現在の富山県氷見（ひみ）市で町医者の子として生まれた。医者を継ぐのが嫌だった彼は、若い頃から加賀の豪商銭谷五兵衛に憧れて商人を目指した。北海道から江戸、大坂に及ぶ広い商圏で海運業を営み、河北潟などの埋め立てを行った五兵衛の活動は、奇妙に後の総一郎の業績と相通ずるものがある。

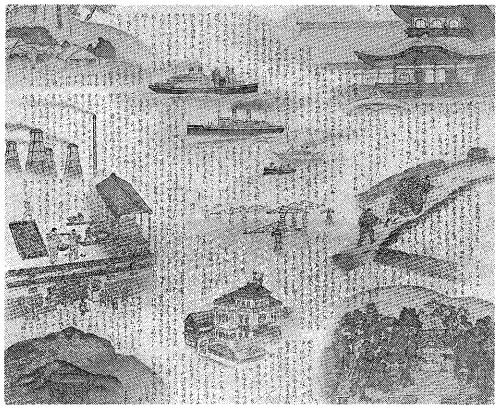
大志を抱く者にとって、古い秩序の残っている富山の一地方で、ささやかで安定した一生を送ることは望むべくもない。浅野は、織機業、醤油醸造、稲扱（こ）き機販売と新しい商売に手を出すが、すぐ夢が広がりすぎて、ことごとく失敗する。さらに近村の庄屋の入り婿になって、産物会社を設立するが、これも倒産し、「総一郎ではなく損一郎だ」と言われて、養家から追い出されてしまった。ついには、金貸しから借りた大金の返済催促に耐え兼ねて、東京に出奔したのが二十五歳のときである。

維新直後の東京で、夏に冷たい水を売る「冷やっこい屋」をして糊口を凌（しの）いだ浅野は、秋になると横浜に出ることとした。当時の横浜は、文明開化の中心地であり、古い価値観にとらわれない国際貿易港として、国中から成功を夢見る若い商人たちが集まっていたからである。

しかし富山から夜逃げしてきた浅野には、商売を始めようにも元手がない。そこで彼は農家で捨てている竹の皮を仕入れて、ものを包む容器として売る商売を始めた。それは彼にとって、はじめての商売の成功になったが、小規模な事業で満足する浅野ではない。彼は竹の皮から薪炭へ、さらに石炭へと扱い品目を増やし、事業を拡大していった。

こうして商売も順調に行きはじめた頃、石炭を納めている役所や工場で浅野が目にとめたのが、処理に困って山積みにしたり、穴を掘って埋めていた、石炭の廃物であるコークスやコールタールである。彼は竹の皮で得た「世の中に不要なものはない」という教訓を

図―1



生かし、技術者を雇い検討を加えて、コークスを燃料として再利用したり、コールタールから石炭酸を取り出して、コレラの消毒薬にして販売することに成功する。これらの成功によって、かつての「損一郎」はいまや「廃品利用の天才」と呼ばれ、資源のリサイクルの先駆者になったのである。

王子製紙の工場からコークスを引き取ったことが縁となって、浅野は社長をしていた渋沢栄一の家に招かれた。当時渋沢は大蔵省を辞して野に下り、実業界の向上、発展のため、第一銀行、銀行集会所、手形交換所、東京商工会議所を設立していた。社会的意義のある事業を、民間人として長期的視野でやっていこうとする渋沢の経営理念は、若い浅野を感銘させ、かつて富山時代にもっていた企業家としての夢を広がらせた。

渋沢の方は豪放な性格の浅野に、自分にはない企業家としての才能をみた。大きな夢を描きながら、知恵を絞って努力し、何としても事業をやり抜く、浅野の性格はこれからの日本に必要な製造業の経営にぴったりである。三菱や三井のように政界と結びつかず、暖簾も人脈もない、徒手空拳の若者を助けてやろう。愛嬌のある浅野の性格を気に入った渋沢は、そう決意した。

経済界の指導者渋沢栄一の知遇を得た浅野が、まず目をつけたのが、深川のセメント工場である。明治の初期、銀座に煉瓦でできた西洋的な街を実現するため、官営で設立された同工場は、当時大量の赤字を出して休業していた。浅野はそれを何とか再開したいと言って、渋沢に協力を頼んだのである。

深川工場は三井や三菱が、倉庫や別荘の土地として着目し、同様に払い下げを申請していたが、彼らはセメント事業自体には興味を示していない。

他方、浅野はあくまでセメントにこだわった。事業の将来性を危ぶむ渋沢に、彼は東京に出てきた頃、風呂屋で「赤猫」という言葉を耳にした経験を話した。赤猫とは江戸の名物である火事の意味で、これから東京が近代都市として生まれ変わるためには、建築の不燃化が必要であり、セメントの需要も伸びる筈だ、と説いたのである。

「市区改正」の審査委員をつとめ、不燃都市実現の重要性を認識していた渋沢は、この言葉に強く動かされ、彼の口利きによって払い下げは実現する。

浅野は深川工場の一角に家族で引っ越し、毎朝六時に従業員を門で出迎え、一日中彼らと一緒になって身を粉にして働いた。自宅を工場から離した方がよいという周囲からの忠告も、彼はきかなかった。壮大な夢を描きながら、アイデアを駆使し、現場主義で実行していく姿勢は、のちの京浜埋立にも引き継がれていく企業家浅野総一郎の特徴である。

さらに浅野はセメント事業の資金援助を、同郷の先輩である銀行家の安田善次郎に頼み込んだ。安田は現在の富士銀行、安田火災、安田生命等の創始者にあたる。「勤倹堂（きんけんどう）主人」と自ら称し、その吝嗇（りんしょく）ぶりは、ある慈善事業に「寄付すれば、男爵にしてやる」と政府から言われたときも即座に断ったという逸話があるぐらいだが、逆に壮大な夢には惜しげもなく金を注ぎ込む、真の意味の銀行家でもあった。

安田は十歳年下の浅野に、自分がもっていない企業家のロマンチシズムをみた。後に安田は東京市長後藤新平に「あなたにだけは聞いておいてもらいたい」と言って、浅野をこう評している。

「一体金なるものは集めるもよろしいが、さて集めて見ると散ずるのが大儀になるようである。御承知の浅野総一郎という男はなかなか大胆な計画を立て、金を投ずるのに苦労している人です。……あれだけの仕事をする男を援助して、かりに目的が遂げられず、資金が丸潰れになっても私はさほど遺憾には存じません。これは決して浅野その人についていうのではありませんが、大きな仕事をする人に大きな援助を与えることは真の国家的にして且つ慈善博愛の根本義また防貧の真意にかなうものではありますまいか」（『浅野総一郎』）

以後安田は、その沈着な性格で、豪放で陽気な浅野と、京浜臨海部埋立をはじめとする多くの事業で長いコンビを組んでいく。人はこれを「浅野はエンジン、安田は石炭」と呼んだ。現在の芙蓉グループが、安田系と浅野系という、旧二財閥系企業を主要メンバーにしているのは、このためである。

企業家浅野の業績は、渋沢、安田二人との交友を抜きには語れない。渋沢は東京瓦斯、第一国立銀行、日本鉄道など民間の中でも公共的性格の強い会社を設立し、東京商法会議所を組織するなど、高い社会的理念と識見をもった経済界の指導者であった。また安田は幕末維新の混乱期に富を蓄財し、その後は数

多くの銀行を吸収合併していった金融資本家であった。

浅野は、渋沢のような高い識見をもった実業家ではなかったし、安田のように蓄財の才に恵まれていた訳でもない。しかし、彼には、二人にはない、大きな夢を描き、実現に向かって努力邁進し、事業を成功させる才能とエネルギーをもっていた。渋沢や安田は工業経営に何度か手を染めながら、浅野のように企業家としてはあまり成功していないし、逆に浅野は一度銀行経営に乗り出しながら、巧くいかず、安田に引き取ってもらう結果となっている。

結局渋沢、安田、浅野の三人は、それぞれがもつ識見、金融、企業家の才能を相補いながら、多くの事業を実現することができたのであり、そのもっとも代表的なものが、京浜臨海部埋立だったのである。

3 京浜工業地帯の形成

一九一三（大正二）年、鶴見埋立組合は鶴見埋築会社（現在の東亜建設工業）へと発展し、埋立は始まった。埋築会社創立時の株式総数は七万株、内浅野系が二万三千、安田系一万六千、渋沢・徳川系各八千を占めている。徳川系は、かつて幕臣であった渋沢の口利きによるものであろう。

埋立工事の主役は国産のポンプ船であった。埋立はカッターで掘り崩した土を、ポンプの力で水とともに吸い込んで、パイプを通し、海上の埋立予定地まで送らなければならない。ところが、最初英国から輸入した三百五十馬力のサンドポンプ船は、土質と機械の能力がかみ合わず、埋立計画は遅れ気味になったのである。

急遽（きゅうきょ）七百五十馬力の、日本の土質にあった国産第一号のポンプ船が建造され、工事はようやく軌道に乗り始めた。

セメント事業のときと同じように、浅野は工事現場にやって来て、毎朝工程の進行を督励した。

のちに東亜建設工業会長となる小柴健太郎は、シャッポをかぶり、ストッキングをはいて半ズボン姿の総一郎が、顔だけしか覚えていない若い小柴を、「おいキミ、臨港」と会社名（鶴見臨港鉄道）で呼んで、現場を案内させたことを、次のように記憶している。

「そのとき感心したことは、天下の浅野さんさぞこわい恰好をしてお伴をゾロゾロ連れてくるのかと思ったら、お供は一人だけ。恰好も洋服はヨレヨレだしストッキングもつぎはぎだらけなんだ。側近とか家族はいろいろ言うけれども、『いや、現場へ行くのにはこれでたくさんだ』って頑張って、そういう恰好でステッキついて、達者なもんでしたよ」（『東京湾埋立物語』）

京浜臨海部埋立は運河の開削と工業地帯の造成という一石二鳥を狙ったものだったが、実は浅野にはもう一つ目的があった。

それはセメント工場の移転である。

一九〇三（明治三十六）年、浅野は深川工場にわが国初の回転窯を導入し、四年後には浅野セメントの資本金を八十万円から一挙に五百万円増資、設備の大拡張を行っていた。

払い下げのとき、渋沢に力説したように、日露戦争後、近代都市へ脱皮する東京において、セメントの需要は飛躍的に伸びていた。

しかし、設備の拡張は工場周辺にセメントの粉塵が飛び散り、地元住民との間で紛争を巻き起こす。工場側は防塵施設の設置など対応策に努めたが、地元住民の納得を得ることができず、ついに明治四十四年、会社、住民の双方がそれぞれ仲裁人をたてて協議した結果、五年以内に深川工場を撤去せざるを得なくなった。それで総一郎は京浜埋立地に最新式の防塵施設を整備した新工場を建設しようとしていたのである。

いわば京浜埋立には一石二鳥ならぬ、セメント工場移転を加えた運河堀削との「一石三鳥」が目論まれていたのだ。

もっともセメント工場は、移転時期が迫っていることから、結局埋立地ではなく、隣接した田島村大島新田の臨海湿地に建設された。しかも新工場が完成した大正六年末、アメリカから導入したコットレル式電気集塵機が効果があることが分かって、深川工場の閉鎖は白紙に戻っている。

こうして京浜臨海部埋立の目的の一つであったセメント工場移転は、深川工場の存続に加えて、川崎新工場の操業という予想外の結果を生むこととなり、第一次世界大戦による好景気、関東大震災の復興のなかで、供給能力を大きく伸ばした浅野セメントは莫大な利益を生むこととなる。

京浜臨海部に最初立地した工場の多くは、浅野系であった。

代表的なものが、浅野の女婿である白石元治郎、渋沢の女婿大川平三郎、そして製鉄技術者今泉嘉一郎らによって、一九一二（明治四十五）年に設立された日本鋼管である。同社は民間による製鉄、とくに継目無し鋼管製造を目的としてつくられたもので、埋立予定地に隣接する南渡田に最初の製鉄所を建設、やがて工場を埋立地に拡張していった。

そして総一郎自身も同じ頃鶴見に設立した浅野製鉄造船（一時「浅野造船所」とも呼称）と後に合併して、今日に至っている。また東京瓦斯、沖電気など浅野や渋沢に縁のある会社の工場も、埋立地に立地した。（図―2）

関東大震災後は、芝浦製作所、富士電機、日清製粉、日本石油、三井物産など浅野財閥に属さない企業も、新設や破壊された工場の移転先として、埋立地を購入しはじめるようになった。これは鶴見・川崎の震災被害が、火災の延焼を免れたこと、埋立地の地盤が強固だったことによるもので、地域の安全性、工事の優秀性が立証されたからである。

浅野は京浜臨海部埋立を総合的な地域開発としてとらえていた。例えば、交通では物流と従業員の通勤のために鶴見臨海鉄道を設立、現在のＪＲ鶴見線を敷いている。その駅名が「浅野」や「安善」（安田善次郎）「武蔵白石」（白石元治郎）「大川」（大川平三郎）「扇町」（扇は浅野の家紋）など京浜臨海部埋立の功労者たちにちなんでいるのは、かつてのなごりである。また浅野は南武鉄道や京浜急行の経営にも参加している。

京浜埋立地の各工場に供給するエネルギーに関しては、渋沢、安田らとつくった東京瓦斯が製造所を新設したほか、水道、電気などの会社を新しくつくっている。

さらに彼は労働者のための病院・住宅を建設し、京浜工業地帯を見下ろす新子安の高台に、技術者を養成する教育機関として、現在の浅野学園を創立した。学園内に工場を設けた教育システムもユニークだが、「労働・遊戯・勉強」の重視や、「公立の中学よりも授業料の安い私立中学」を目指したという話は、如何にも浅野らしい。

また晩年には、京浜臨海部を生産機能に偏重させるばかりではなく、百貨店や宝塚のような遊園地をつくり、少女歌劇団や女優養成のための学校を設立しようとしていたという（『父の抱負』）。もし浅野がもう少し長生きしていたら、彼は小林一三のように、レジャーや文化、住宅といった生活産業の分野にも大々的に進出していたであろう。

4 浅野の死と臨海部の発展

浅野が出願した埋立が完了したのは一九二七（昭和二）年、欧米の港湾を視察して感嘆の声をあげてから実に三十年、埋立開始から十四年を要した。しかも、それはまだ最初の夢の一部でしかなく、八十歳の彼は鶴見埋築会社を東京湾埋立会社と改称、千葉沖にも新たな埋立を行おうと計画する。

しかし、ニューヨークで起こった株価大暴落の影響は、世界大恐慌として日本をも巻き込み、震災復興の好景気は急速にしぼんでいった。安田が右翼の凶刃に倒れた後、浅野の夢に巨額の資金を出そうとする銀行は少なく、京浜の埋立地も売れ残った。「東の浅野、西の金子」と積極経営で並び称された金子直吉が率いる鈴木商店が倒産したように、浅野財閥も窮迫の状況に陥った。

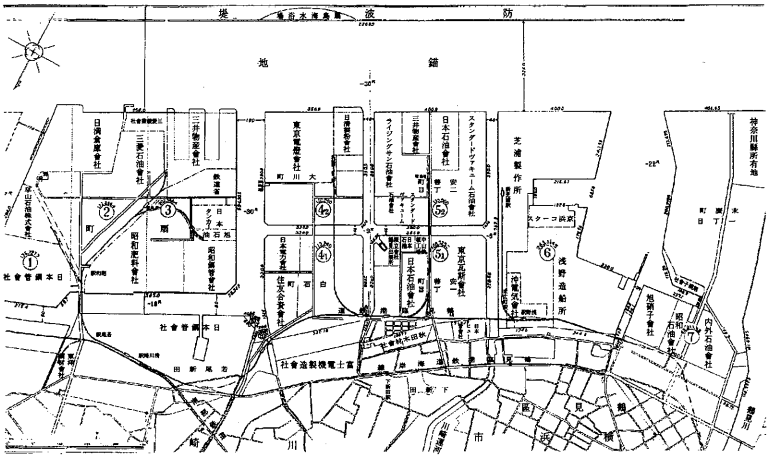
危機感をもった浅野は一九三〇（昭和五）年五月、欧米諸国視察の旅に出発する。初めての外遊の折り、欧米の近代的港湾を見て、東京港築港と京浜運河開削を思い立ったように、彼は再び新しい事業の種を見つけようとしていたのであろうか。

新事業への充電のつもりで出発した浅野が病の床についたのは、わずか三ヶ月後、ベルリンにおいてである。食道癌という診断を聞いた彼は、「それは大変だ。仕事を急がねば」と、今後の事業構想を病床で秘書に記録させながら死んだ。まさに死の日まで浅野総一郎は「事業の鬼」であった。

当時の著名なジャーナリスト徳富蘇峰は、浅野を「非凡なる脱線的人物」と評し、「浅野君の本領は、常に仕事を主に、利益を従とし、孜々止まず、一生の努力から、その仕事の上に捧げんとするところにある。子孫のための計りごとということは、浅野君にとっては、付けたりごとと思う」と書いている。浅野はあくまでも民間企業家として、京浜工業地帯を構想し、実現した。そしてその底には、渋沢や安田と共通する、明治の実業家としての大きな夢と雄渾な精神があったように思う。

浅野の民間としての精神が、その死後も受け継がれた好例が、一九三二（昭和七）年の日本鋼管による製鉄合同不参加である。日中

図―2　「東京湾埋立株式会社事業案内」より



戦争下の軍事産業体制確立を目指した、政府主導による製鉄合同の動きに対し、浅野の女婿白石元治郎は統制経済が企業の柔軟性を失わせ、技術発展を鈍らせるという危惧をもって反対した。さらに彼は、川崎の扇町に高炉を建設、浅野製鉄造船と合併して、官営の八幡を中心とした日本製鉄に対抗の姿勢を示した。

第二次世界大戦によって壊滅的打撃を蒙った京浜工業地帯が、戦後不死鳥のようによみがえり、日本経済の高度成長を築いていったのも、浅野、安田、渋沢そして白石らが、この地に託した夢とエネルギーによるところ大であったに違いない。

その後の環境問題、そして昨今の産業構造の転換といった情勢のもとで、京浜工業地帯は、埋立時代、戦後の復興につづく、第三の創世期を迎えているように見える。この問題について述べる紙幅は既にないが、浅野たちがこめた民間の活力、たくまざる企業家精神は、なおこの地域の未来を切り開く鍵となり得るのではないだろうか。例えば浅野が竹の皮やコールタールで得た廃物利用の知恵は、この地域に蓄積された高度な環境技術と結びついて、従来の工場イメージを一新させる水と緑に囲まれ、生産と生活が融合した街へと、京浜臨海部が変貌することに寄与するに違いない。

また浅野の総合的地域開発の視点や実行力も、今後の都市開発に一石を投じていよう。

かつて浅野が感銘を受けたロンドン、テームズ河岸ドックランズは今や業務、研究開発、商業、アメニティ、住宅などを含んだ、新しい町へと再開発され、変貌しつつある。一方、京浜臨海部は、これからどのように変わっていくのか。また変えていくべきなのか。

シャッポをかぶり、ストッキングに半ズボンのいでたちで、小高い新子安の丘に立つ浅野総一郎の銅像は、それを好奇心に満ちた目で今日も見守っているのである。

（主要参考文献）

浅野総一郎（二代）・良三『浅野総一郎』（一九二三）　愛信社
浅野総一郎（二代）『ひもかがみ』（一九二八）浅野文庫
同『父の抱負』（一九三一）　浅野文庫
北林惣吉『浅野総一郎伝』（一九三〇）千倉書房
城山三郎『野性の人びと』（一九八一）文春文庫
田村明『都市ヨコハマ物語』（一九八九）時事新報社
新田純子「総一郎を歩く」『クラクション』　連載中
矢野竜渓『安田善次郎伝』（一九一五）中公文庫
『浅野関係会社名簿』（一九四一）
『浅野総一郎一代記』（絵巻）（時期不明）
『川崎市史』（一九六八）
『鶴見区史』（一九八二）
『鉄鋼巨人伝・白石元治郎』（一九六七）鉄鋼新聞社
『東京湾埋立株式会社事業案内』（時期不明）
『東京湾埋立物語』（一九八九）東亜建設工業
『日本セメント株式会社百年史』（一九八五）
『日本鋼管株式会社七十年史』（一九八二）
東秀紀「浅野総一郎と京浜工業地帯」『江戸・東京を造った人々：都市のプランナーたち』（一九九三）所収

また本稿執筆には、総一郎のお孫さんにあたる浅野五郎（浅野總業会長）、新田純子（作家）両氏のお話をお伺いすることができました。この場を借りて御礼申しあげます。新田氏は来年浅野総一郎を主人公とした小説を主婦の友社より発表予定とのこと。その成果が期待されるところです。

〈日本鋼管株式会社総合都市開発事業部次長〉